

## 目 次

1	まえがき	1
2	結果の分析	
	基礎・共通および資格関係	2
	音楽学部	4
	人文学部	7
	人間発達学部	9
	グループ平均一覧	14
3	学生による授業価アンケートの調査結果及び教員によるコメント	16
4	資料	212

## 授業評価アンケート結果の分析（人間発達学部）

### はじめに

質問項目（1～14）の内容と実施時期（12月調査）は昨年と同じであるが、調査対象の基本属性にかなりのばらつきがあり、また評価値平均のみで授業評価の傾向を述べることは難しい。しかしながら、毎年全く同じ状態で授業評価アンケートを実施し分析することも難しいと思われるので、2012年度の調査対象（基本属性）についてまず述べ、次に子ども発達学科と発達栄養学科について前年との評価値平均の比較を行うことで授業改善の参考となる事項がないか模索したい。

人間発達学部の学生は入学の時点で、子ども発達学科では保育士・教員免許、発達栄養学科では管理栄養士・栄養教諭免許の取得をほぼ全員が目指しており、これらの免許・資格を取得するために各学年に配当された多くの必修（選択必修）科目を履修し単位取得することが前提となり、Ⅰ～Ⅱ回生では講義ならびに実験・実習科目、Ⅲ～Ⅳ回生では学外（隣地）実習科目が多く配当されている点がカリキュラムの特徴である。

### 2012年度の調査対象（基本属性）

- 1) 人間発達学部では、学部専門基礎（子ども/栄養）3科目、子ども発学科 18科目、発達栄養学科 23科目の計 44科目で授業評価アンケートが実施された。
- 2) 子ども発達学科（以下子どもと略す）、発達栄養学科（以下栄養と略す）とも公的免許・資格取得に伴う必修科目（専門基幹）が多く、2012年度も調査対象の90%以上が必修科目であった。（表1）
- 3) 学年別に調査された科目数（専門基礎科目を除く）が多いのは、子どもではⅠ、Ⅲ、Ⅱ、Ⅳ回生の順、栄養ではⅡ、Ⅰ、Ⅲ、Ⅳ回生の順となった。特に栄養でⅡ回生開講科目の調査数が多く（43%）なっていた。（表2）
- 4) 調査科目の受講者数をみると、子どもでは40名以上の受講者に対する授業が65%以上に対し、栄養では21～30名の授業が70%を占めていた。これは子どもでは1～2クラス編成、栄養では2～3クラス編成の授業が多いことを反映している。栄養で受講者が30名を超える科目は再履修者があると考えられる。（表3）

表1. 科目別区分

	科目区分別による調査科目数			
	専門基礎	専門基幹	専門研究	専門関連
子ども発達学科	3	16	1	1
発達栄養学科		21	1	1

表2. 学年別区分

	学年区分による調査科目数			
	Ⅰ回生	Ⅱ回生	Ⅲ回生	Ⅳ回生
子ども発達学科	8	3	5	2
発達栄養学科	8	10	3	2

表 3. 受講者数別区分

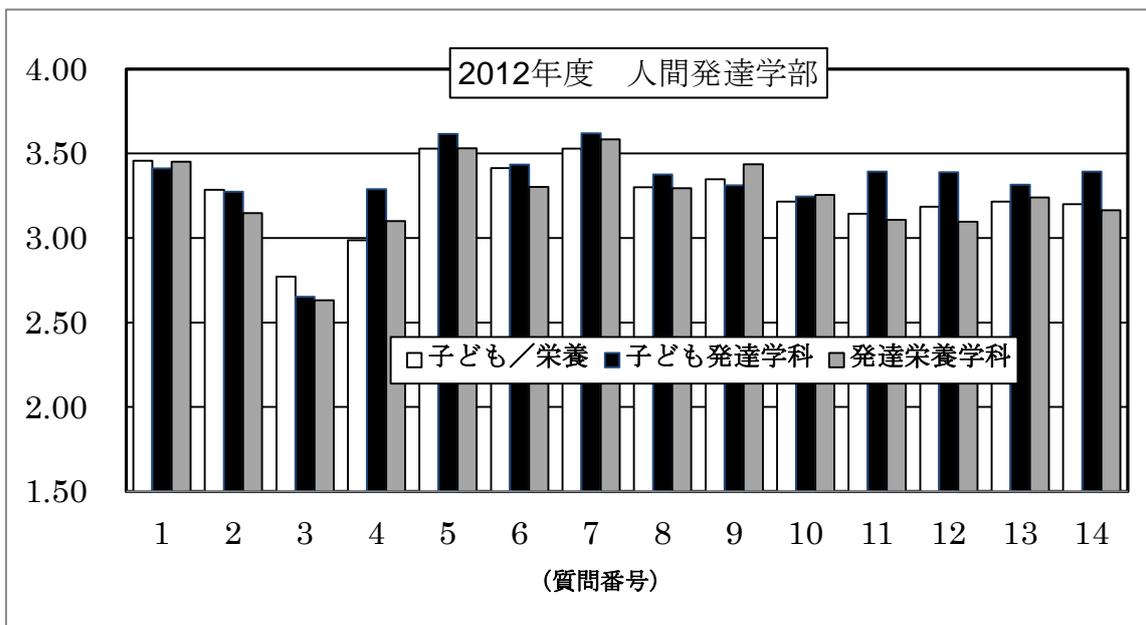
	受講者数別調査科目数						
	10名以下	11～20名	21～30名	31～40名	41～60名	61～80名	80名以上
子ども発達学科	2	1	2	1	5	5	2
発達栄養学科	2	1	16	3	1	0	0

5) 2012年度の調査科目のうち、子どもでは14科目(78%)、栄養では14科目(61%)が2011年度も授業評価アンケートが実施されていた。

### 2012年度の評価値平均

質問1～14の評価値平均は14ページに掲載されているとおり、学部専門基礎(子ども/栄養)3.26、子ども発達学科3.34、栄養発達学科3.24であった。図1に示すように、両学科で、評価値平均が3.5を超えたのは「教員に対する評価」で問5(教員の熱意)と問7(教員の時間厳守)である。「学生の評価」では問1(学生出席)が両学科で高くなっているものの、問2(熱心に授業に取り組む)や問4(授業目的の理解)が相対的に低くなっている。最も低い値は他の学部・学科と同様に問3(シラバスをきちんと読む)で子ども(2.65)、栄養(2.63)であった。人間発達学部の学生は公的な免許・資格取得を大きな目的(目標)と捉え出席を重視しているが、個別の授業が何のために必要なのかその目的を理解する事に興味が高いように見受けられる。教員側はシラバスでの目的や到達目標を簡潔明瞭に表現し学生が理解しやすく工夫する事と同時に関連する教科間で連携を図って改善に取り組むことも必要と思われる。問3に関しては学年が上がると共にきちんと読む学生が増えていくのか授業形態との関連性等より詳細な解析を学部・学科単位でさらに全学的にも行うことが必要ではないだろうか。

図1. 人間発達学部の評価値平均 (2012年度)



## 前年との比較(学科別)

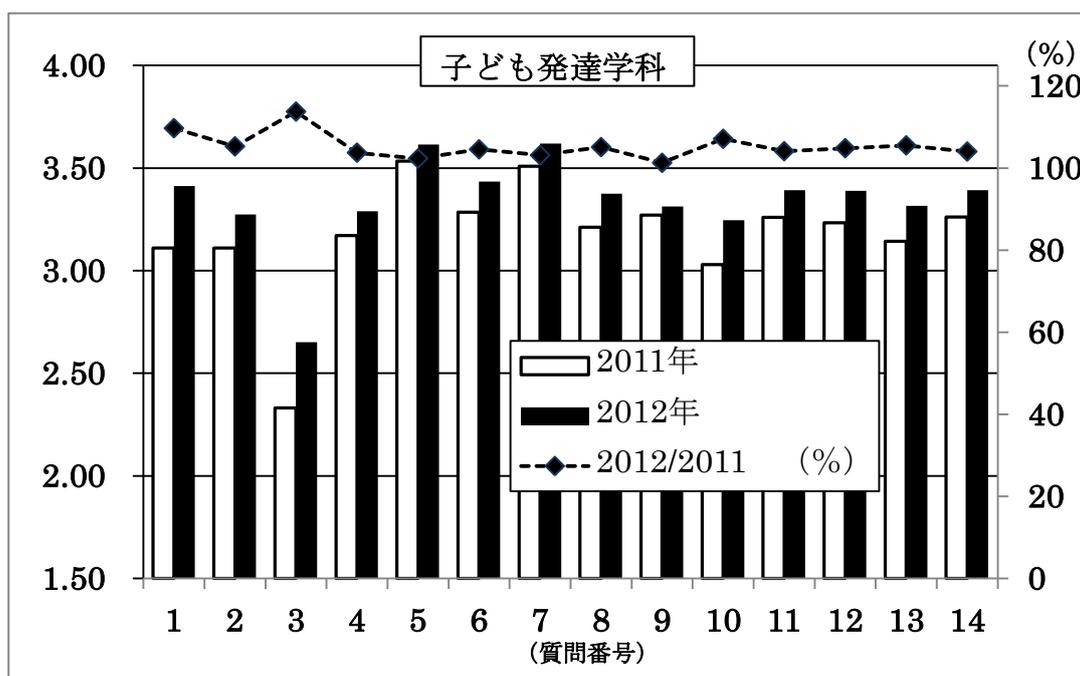
### (1) 子ども発達学科

2012年度の結果を昨年と比較した(図2)。同時に、各項目の前年比(%) (2012/2011) 図2に示したが、子ども発達学科ではすべての質問項目で2011年の評価値平均を上回る結果(100%以上)となった。

2012年度の全質問項目の評価値平均(3.34)は2011年度の値(3.18)より0.16ポイント高くなっている。項目別で見ると「質問3(シラバスをきちんと読む)」で0.32ポイント(前年比:114%)、次いで「質問1(授業に出席する)」が0.3ポイント(前年比:110%)高くなっている。教員に対する評価では「質問10(教員のシラバス遵守)」が0.2ポイント(前年比:107%)高くなっている。その他の項目も評価値の平均(3.34)に近く、各項目の評価値にばらつきが少ない結果となっている。

調査対象(基本属性)に差があり一概に言えないが、これまでの取り組みで教員と学生が双方向性で全体に改善の方向に進みつつある事を示すものではないかと思われる。2013年度以降の取り組みにこれらの結果を活用し、さらに改善が進む事を期待したい。

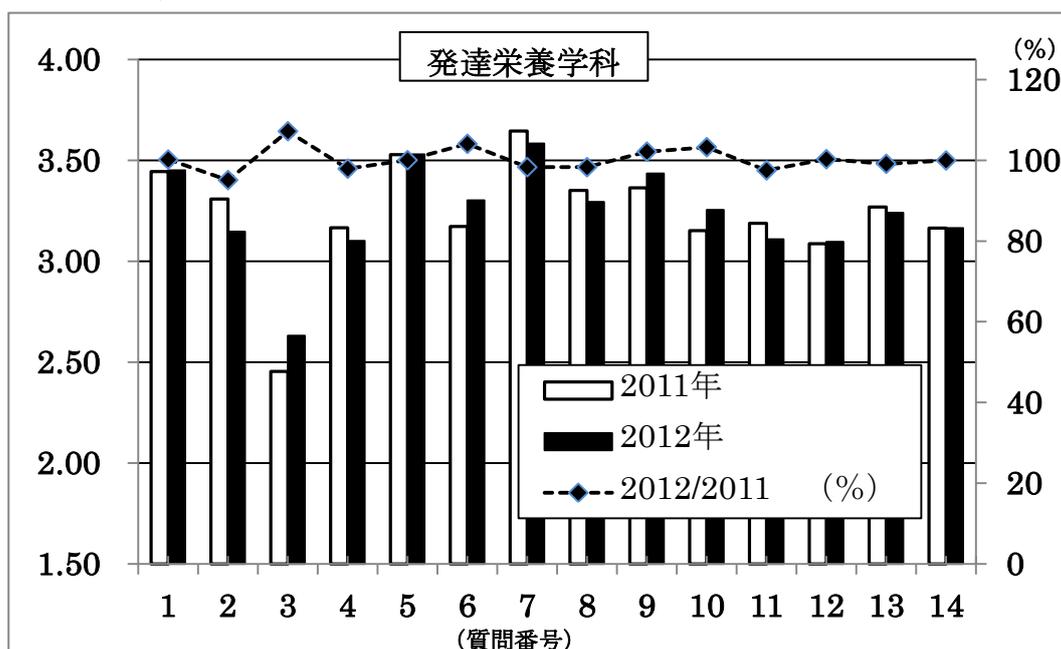
図2. 子ども発達学科の評価値平均(前年との比較)



### (2) 発達栄養学科

2011年度、栄養の調査科目数(専門基礎科目を除く)は33であったのに対し、今年度の調査数は23で前年度の70%に減少した。さらにこの23科目も同一科目での調査は13科目にとどまっており、昨年との比較がどこまで参考になるのか不明であるが、子どもと同様の書式で調査結果を図3に示した。

図3. 発達栄養学科の評価値平均（昨年との比較）



2012年度の全質問項目の評価値平均(3.24)は2011年度の値(3.24)と変化がなかった。項目別に見ると2011年度より評価が高くなった(前年比:100%以上)のが4項目「質問3, 6, 9, 10 (シラバスをきちんと読む、教員の話し方、教材の効果的な使い方、シラバスにも基づく授業)」で前年比で最も評価値が高かったのは「問3(シラバスを読んだ)」は0.18ポイント(前年比:107%)である。低くなった(前年比:95%)のが1項目「質問2(授業への熱心さ)、やや低いか変動しなかった(前年比:98~99%)のは9項目であった。学生の教員への評価は一部改善されていると思われるが、問12(学生の授業に対する理解のしやすさ)が前年と同じで変わらず全体の平均に達していない点は教員側の差もあるかもしれないが、学科全体の問題と捉え関連する科目間の連携による工夫など多面的な取り組みも必要と思われる。

全項目の平均が3.24であることはまだまだ改善の余地が多いことを示唆しており、学科の特性を考慮しつつ教員が共通認識をもって改善に取り組んでいくことが重要と考える。

【参考：図 1, 2, 3 の作成資料】

表 4 人間発達学部における評価値平均の比較

(前年比(%)：2012年/2011年)

問	質問内容	子ども発達学科			発達栄養学科		
		2012年	2011年	前年比(%)	2012年	2011年	前年比(%)
1	私は休まず授業に出席している。	3.41	3.11	110	3.45	3.44	100
2	私はこの授業に熱心に取り組んでいる。	3.27	3.11	105	3.15	3.31	95
3	私は講義要項(シラバス)をきちんと読んだ。	2.65	2.33	114	2.63	2.45	107
4	私はこの授業の目的を理解している。	3.29	3.17	104	3.10	3.17	98
5	担当教員は熱意を持って授業している。	3.62	3.53	102	3.53	3.53	100
6	担当教員の話し方はわかりやすい。	3.43	3.29	105	3.30	3.17	104
7	担当教員は授業時間を守っている。	3.62	3.51	103	3.58	3.65	98
8	担当教員は学生主体の授業にしようとしている。	3.38	3.21	105	3.29	3.35	98
9	板書、プリントやパワーポイント、視聴覚教材が効果的に用いられている。	3.31	3.27	101	3.44	3.36	102
10	授業は講義要項(シラバス)に基づいて実行されている。	3.25	3.03	107	3.25	3.15	103
11	授業の内容は興味深い。	3.39	3.26	104	3.11	3.19	98
12	授業の内容は理解しやすい。	3.39	3.23	105	3.10	3.09	100
13	成績の評価基準が明瞭に示されている。	3.32	3.14	106	3.24	3.27	99
14	この授業に満足している。	3.39	3.26	104	3.16	3.17	100
	(平均値)	3.34	3.18	105	3.24	3.24	100

(文責 太田 美穂)

授業評価アンケート調査結果 グループ平均一覧

	基礎・共通	音楽学科	音楽マネジメント学科	日本文化学科	仙教文化学科	文化交流学科	人間心理学科	社会デザイン学科	子ども／栄養	子ども発達学科	発達栄養学科	資格関係	留学生
問1	3.20	3.27	3.26	3.35	3.25	3.32	3.07	3.08	3.46	3.41	3.45	3.33	3.81
問2	3.24	3.27	3.21	3.45	3.03	3.42	3.22	3.16	3.29	3.27	3.15	3.39	3.85
問3	2.75	2.80	2.83	3.18	2.76	3.12	2.73	2.95	2.77	2.65	2.63	2.91	3.74
問4	3.13	3.41	3.21	3.42	2.87	3.36	3.30	3.17	2.99	3.29	3.10	3.34	3.88
問5	3.60	3.70	3.62	3.75	3.45	3.77	3.64	3.72	3.53	3.62	3.53	3.71	3.93
問6	3.36	3.51	3.26	3.62	3.07	3.75	3.44	3.52	3.41	3.43	3.30	3.58	3.91
問7	3.63	3.62	3.51	3.70	3.37	3.78	3.71	3.80	3.53	3.62	3.58	3.62	3.99
問8	3.33	3.44	3.44	3.56	3.10	3.67	3.57	3.51	3.30	3.38	3.29	3.58	3.92
問9	3.38	3.42	3.21	3.57	3.06	3.61	3.41	3.63	3.35	3.31	3.44	3.62	3.89
問10	3.33	3.40	3.17	3.58	3.02	3.65	3.50	3.62	3.21	3.25	3.25	3.42	3.94
問11	3.23	3.46	3.31	3.51	3.03	3.59	3.45	3.44	3.14	3.39	3.11	3.46	3.79
問12	3.25	3.36	3.19	3.46	2.93	3.58	3.44	3.37	3.19	3.39	3.10	3.48	3.86
問13	3.32	3.40	3.31	3.57	3.09	3.61	3.53	3.37	3.21	3.32	3.24	3.47	3.92
問14	3.32	3.38	3.28	3.56	3.17	3.59	3.51	3.48	3.20	3.39	3.16	3.47	3.87
平均値	3.29	3.39	3.27	3.52	3.09	3.56	3.39	3.42	3.26	3.34	3.24	3.46	3.88

授業評価アンケート調査結果 グループ平均一覧(レッスン)

	音楽学科	声楽専攻	ピアノ専攻	創作演奏専攻	オルガン専攻	管弦打楽器専攻	古楽器専攻	作曲専攻
問1	3.36	3.58	3.71	3.48	4.00	3.91	3.33	3.50
問2	3.78	3.88	3.86	3.89	3.50	3.98	3.00	3.50
問3	3.62	3.75	3.90	3.74	4.00	3.88	3.67	3.88
問4	3.09	3.46	3.53	3.15	3.00	3.53	3.33	3.50
問5	3.88	3.92	3.96	4.00	3.50	3.94	4.00	3.88
問6	3.84	3.88	3.92	3.93	4.00	3.92	4.00	3.88
問7	3.78	3.88	3.88	3.96	4.00	3.96	4.00	4.00
問8	3.66	3.88	3.90	3.93	3.00	3.91	4.00	3.75
問9	3.86	3.92	3.94	3.96	4.00	3.97	4.00	3.75
問10	3.89	3.96	3.94	4.00	4.00	3.99	4.00	4.00
問11	3.91	3.79	3.90	3.93	4.00	3.89	4.00	3.88
問12	3.90	3.75	3.96	4.00	4.00	3.87	4.00	3.75
平均値	3.72	3.80	3.87	3.83	3.75	3.89	3.78	3.77

## まえがき

本年度は、昨年度の結果との比較を重視し、昨年度と同じ質問項目を用い、同じ時期（12月）に、同じ科目選択方式（各教員の担当授業のうち、必修科目、選択必修科目または受講者数のできるだけ多い科目1クラスを対象）でアンケートを実施しました。また、これまで同様、5名以上の回答があった場合は集計結果を各担当者に返却し、アンケート結果に対する意見および改善方法などを記したリフレクション・ペーパーを作成していただきました。ご協力ありがとうございました。ただ、昨年度に引き続き、前期科目のみご担当の先生方にはアンケートの機会を提供できず、申し訳ありませんでした。

本アンケートの目的は第一に、各教員が、現在の本学学生に適するよう授業形態や学習指導法を改善するのに必要な情報を得ることにあります。先生方がアンケート結果を真摯に受け止め、授業改善に活かしていただければ幸いです。しかし、各部局あるいは大学として教育の改善に努めることも重要ですので、そのための参考資料とするべく、FD委員会において学部・学科別、学年別、科目別などの集計や分析を行いました。厳密な分析計画に基づいておらず、また短期間に行いましたので十分な分析ができたとは言えないかもしれませんが、考慮すべき点や改善すべき点を指摘いたしました。それらにつきましては、次ページ以降の学部・部門別の分析をご覧ください。

なお、この授業アンケートは、修正を加えつつ、次年度以降も実施していく所存です。昨今はアンケートや研修会などの回数が増えており、FD疲れで活動が機械的、消極的になることが危惧されます。しかし、先生方におかれましては、FDは義務化されたから仕方なしに行うというものではなく、自分たちの大学の価値を高めるためのものにご理解いただき、いっそうご協力くださいますようお願いいたします。

2013年3月1日

相愛大学FD委員会

江草浩幸

中村圭爾

川中美津子

砂田和道

橋元淳一郎

太田美穂

藤永慎一

左官雅範

桑名志乃ぶ

## 授業アンケート結果の分析（基礎・共通および資格関係）

### 1. 評価の特徴

#### 昨年度との比較

基礎・共通科目の新カリキュラムも2年目に入り、アンケートの質問項目も昨年度と同じなので、評価の経年変化に関して昨年よりは正確な検討ができるのではないかと思われる。

【基礎・共通科目】 昨年度と比べて評価値にほとんど変化はない。最も大きな変化でも、質問3（シラバスをきちんと読んだか）における0.06ポイントの上昇と質問4（授業目的の理解）における0.07ポイントの低下であり、おそらく統計学的に意味はあるまい。また、質問項目間の評価値の相対的順位も昨年度とほとんど変わらないが、一応、その傾向を述べておこう。

評価が最も低い質問群は、質問1、2、3、4（出席、授業への熱意、シラバスをきちんと読んだか、授業目的の理解）である。

相対的に評価が高いのは、質問5、6、7、8、9（教員の熱意、話し方のわかりやすさ、授業時間の守り方、板書などの有効性）であり、教員への評価は悪くないと言える。しかし、評価値そのものに変化はない。昨年も述べたが、評価が既に天井に達していて、これ以上の上昇は困難であるのかもしれない。

評価が中位に位置するのは、質問10、11、12、13、14（シラバスの遵守、授業内容の興味深さ、理解しやすさ、評価基準の明瞭さ、授業への満足度）であり、ほとんど改善が見られない。

【資格関係科目】 昨年度と比べて14項目中13項目で評価値が上昇しており、全項目の平均でも伸びが著しい（3.34から3.46へ）。特に、質問1、2、3、10では0.15ポイント以上、質問12、13、14も0.12ポイント以上上昇している。ただし、これらの質問への評価値は、昨年度も今年度も質問項目中の中位以下のものばかりである。

#### 他部門との比較

昨年も述べたように、受講者数の差があるため科目群間の比較には無理があるが、一応述べておこう。基礎・共通科目の場合、全質問の平均評価値は昨年とまったく同じで、科目群の中位のままである。一方、資格関係科目の平均評価値は、中位から上位に上がった。

### 2. 科目の区分や受講者数と評価との関連性

昨年度の結果の安定性を見るために、新カリキュラムの基礎・共通科目群に関して今年度も同様の分析を試みる。

昨年度とは異なる39科目に関する受講者数と授業の興味深さ、理解しやすさ、満足度との相関係数は、昨年度と同様、いずれもマイナスの値になった（-0.51、-0.39、-0.48）。しかも、昨年度と異なり、全て5%水準で統計的に有意であった。ただし、受講者数と科目の性質との間にも関連がある（必修あるいは準必修の基礎科目は全体的に受講者数が多い、など）ので、性質の似た一般講義科目8つについて相関係数を計算したところ、やはりマイナスの値（-0.65、-0.56、-0.72）になった（興味深さと満足度に関して5%水準で統計

的に有意)。この結果を見ると、受講者数が少ないほど評価が上がるという傾向はありそうであるが、サンプル科目数の少なさや受講生数が極端に少ない場合の評価の不安定性といった問題もあり、簡単に結論を下すことはできない。

また、科目を基礎科目（建学の精神、仏教思想と現代、生命と人間、大学生のための日本語入門、日本語表現法）、一般講義科目（音楽の楽しみ、世界歴史入門、地理学、政治学、教育原論、化学、現代と医学、人権教育）、実技系科目（情報処理演習、健康とスポーツ実習）、英語（日本人講師）、英語（外国人講師）、その他の外国語（ドイツ語、イタリア語、フランス語、中国語）の6群に分けて、評価点の差を検討した。ただし、基礎科目と一般講義科目に関しては取り上げた科目が昨年度とは異なる。昨年度同様、興味深さ、理解しやすさ、満足度のいずれにおいても基礎科目が最低点であり、一般講義科目がそれに次いで低かった。基礎科目の評価の低さには必修という性質と受講生数の多さの両方が関わっていると思われる。一方、それ以外の科目群間の相対的な評価の高低は昨年とは異なった。すなわち、相対的に英語（外国人講師）と実技系の評価が下がり、英語（日本人講師）やその他の外国語の評価が上がった。英語（外国人講師）の評価の変動は5人中3人が交代していることから理解できるかもしれないが、それ以外は担当教員に変化がないので原因はよくわからない。もっとも、これらの傾向は全て統計的に有意ではないので、確かなことは言えないが。

### 3. これからの課題

十分な分析ができたとは言い難いが、読み取れた課題をあえて述べてみたい。

- (1) 出席、授業への熱意、シラバスをきちんと読んだかなどの項目における評価は、基礎・共通科目では相変わらず低かったが、資格関係科目では改善された。したがって、現在評価が低い項目に関しては、授業の工夫次第で改善の余地が十分あると言えよう。
- (2) 授業内容の興味深さ、理解しやすさ、授業への満足度などの重要な項目に関して改善がみられないのは問題である。昨年の繰り返しになるが、教員個々の努力に任せるのではなく、組織として授業内容や教授法の検討を行い、それらに関する教員研修を行う必要があるだろう。
- (3) 相対的に基礎科目の評価が低いことは必修科目の宿命とも言えるが、科目の意義や効用を学生に納得させるために、担当教員が協力してより一層の工夫をする必要があるだろう。

(文責 江草 浩幸)

## 授業評価アンケート結果の分析（音楽学部）

### 1. 評価の特徴

今年度の授業評価アンケートは、昨年度に引続き同じ設問で学生から回答を得ることとした。音楽学部の場合、昨年度に音楽マネジメント学科が新設され、今年度はその 2 年目となった。つまり音楽マネジメント学科は 2 学年が在籍することとなり、ようやく授業評価アンケート結果を検証できる状況になってきたといえるであろう。

今年度の結果、全体の平均値は音楽学科が 3.39 となり、昨年度の 3.5 からのポイント減となった。音楽マネジメント学科は 3.27 となり、昨年度の 3.21 からポイントは微増となった。これは昨年度に認められた音楽学科と音楽マネジメント学科のポイント差異を縮める結果となったが、音楽マネジメント学科のポイント増は学生 2 名程度が昨年度よりポジティブに 1 ポイントアップした程度であることから、今年度の授業評価が改善したと特出できないであろう。

注目する点は音楽学科の授業評価ポイントが「問 1」を除いて「問 2」から「問 14」までの 13 項目でポイント減となり、昨年度よりネガティブな授業評価となっていることである。これらの評価状況については「表 1」を参照して頂きたい。

それから、音楽学科の「レクチャー形式の講座」に対する授業評価にくらべ、「レッスン」に対する授業評価は今年度も高い水準となっている。しかしながら専攻別に調べるとポイント減となった項目を抱える専攻を多く見ることができる。これらネガティブな項目を得た専攻が、存在するということを認めざるを得ないが、そのポイント数は微減であり、おそらく 1 名程度が 1 ポイントダウンさせた程度である。よって、音楽学科の「レッスン」に対する授業評価は昨年度同様に高い水準の評価を得たといえよう（「表 2」を参照）。

では、今年度、および昨年度の結果から推察できる音楽学部の特徴と課題を次の考察において検討したい。

### 2. 考察

#### 2-1 留意点

音楽学部の授業評価を検討するにあたり、まず次の事柄を認め、これらを留意しながら検証する必要がある。

- ①音楽学科と音楽マネジメント学科の学生の差異は、早期専門教育を受けて入学した音楽学科学生と、それとは異なる音楽マネジメント学科学生が存在していること
- ②本学における学習領域、将来への期待に対するビジョンにおいて、音楽学科学生は音楽マネジメント学科学生より明確であること
- ③本学における学習領域は、音楽学科が音楽領域に特化されているのにくらべ、音楽マネジメント学科は横断的な領域（音楽・IT・経営）で広範囲であること
- ④伝統的な対面教育による教授スタイルの音楽学科にくらべ、音楽マネジメント学科はレクチャー形式といった集団的な教授スタイルであること
- ⑤音楽マネジメント学科学生の 2 学年は、1 年生と 2 年生で学力レベル、学習意欲、学習環境に差異があること

これら留意点を勘案しつつ授業評価（レクチャー形式／質問数 14 項目）を検証してみると次の課題を見出すこととなった。

## 2-2 シラバスの周知

昨年度同様にシラバスの周知状況は低い結果となった。これは全学的傾向であるが、特出する留学生の 3.74 という高ポイントにくらべ音楽学科は 2.8 ポイント、音楽マネジメント学科は 2.83 ポイントである。留学生は語学的なハンディキャップがありながらも学習意欲は非常に高い。この状況から音楽学部教育スタッフは学ぶ点があるであろう。それを勧める理由として、昨年度にくらべ音楽マネジメント学科の評価ポイントが 0.5 ポイント上昇した。これは 1 年生の学力、学習意欲が背景にあるのかも知れない。

## 2-3 音楽学科のポイント減について

昨年度の授業評価に対して委員（前任者）より音楽学科の評価水準の高さは、「ほぼ限界ではないか」との見解がある。筆者も同様の視点を持っている。しかしながら、14 項目の質問において 13 項目がポイント減となっている状況を、音楽学部教育スタッフは真摯に受け止め、議論をする必要がなかろうか。

## 2-4 音楽マネジメント学科の授業評価について

昨年度に引続き次の質問項目において、音楽マネジメント学科は音楽学科とのポイント差異が大きくなっている。

「表 1」「表 3」を参照。

問 4 私はこの授業の目的を理解している

問 6 担当教員の話し方はわかりやすい

問 10 授業は講義要綱(シラバス)に基づいて実行されている

これらから見出せる課題の起因は新設学科の講座設定において、そのカリキュラムが適切であったかどうかである。各学年次における開講講座の順番は、学習プロセスに最善とはいえない。基礎科目を受講する前に主科目、応用科目を受講する。あるいは基礎科目が存在しない状況もある。また横断的な領域のために専門性が乏しくなる傾向も否めない。さらに学生の学力レベル、学習意欲も多様化しており、習熟度に似合った教授展開が必要であろう。このような諸状況を勘案しつつ音楽学部教育スタッフが、学生から学習意欲を引き出す外発的動機付けを如何に行い、学生の内発的動機付けを始動させるかが課題といえよう。

(文責 砂田 和道)

	音楽学科			音楽マネジメント学科		
	23年度	24年度		23年度	24年度	
問1	3.24	3.27	101%	3.4	3.26	96%
問2	3.43	3.27	95%	3.26	3.21	98%
問3	2.87	2.8	98%	2.3	2.83	123%
問4	3.51	3.41	97%	3.24	3.21	99%
問5	3.81	3.7	97%	3.42	3.62	106%
問6	3.57	3.51	98%	3.26	3.26	100%
問7	3.79	3.62	96%	3.37	3.51	104%
問8	3.61	3.44	95%	3.4	3.44	101%
問9	3.51	3.42	97%	3.4	3.21	94%
問10	3.51	3.4	97%	2.93	3.17	108%
問11	3.58	3.46	97%	3.3	3.31	100%
問12	3.48	3.36	97%	3.14	3.19	102%
問13	3.48	3.4	98%	3.27	3.31	101%
問14	3.55	3.38	95%	3.28	3.28	100%
平均値	3.5	3.39	97%	3.21	3.27	102%

【表1 ※前年比%】

	音楽学科		声乐		ピアノ		創作演奏		オルガン		管弦打		古楽		作曲									
	23年度	24年度																						
問1	3.22	3.36	104%	3.41	3.58	100%	3.81	3.71	97%	3.53	3.48	99%	4	4	100%	3.9	3.91	100%	3.57	3.33	93%	4	3.5	88%
問2	3.65	3.78	104%	3.86	3.88	101%	3.94	3.86	98%	3.87	3.89	101%	3.5	3.5	100%	3.96	3.98	101%	3.29	3	91%	4	3.5	88%
問3	3.48	3.62	104%	3.82	3.75	98%	3.96	3.9	98%	3.6	3.74	104%	3.5	4	114%	3.9	3.88	99%	3.29	3.67	112%	4	3.88	97%
問4	2.98	3.09	104%	3.27	3.46	106%	3.52	3.53	100%	3.2	3.15	98%	3.5	3	86%	3.54	3.53	100%	2.57	3.33	130%	4	3.5	88%
問5	3.79	3.88	102%	3.86	3.92	102%	3.94	3.96	101%	3.93	4	102%	3.5	3.5	100%	3.98	3.94	99%	3.57	4	112%	4	3.88	97%
問6	3.79	3.84	101%	3.91	3.88	99%	3.96	3.92	99%	3.87	3.93	102%	4	4	100%	3.97	3.92	99%	3.43	4	117%	4	3.88	97%
問7	3.62	3.78	104%	3.82	3.88	102%	3.94	3.88	98%	3.8	3.96	104%	4	4	100%	3.98	3.96	99%	3.57	4	112%	4	4	100%
問8	3.61	3.66	101%	3.86	3.88	101%	3.92	3.9	99%	3.8	3.93	103%	3.5	3	86%	3.91	3.91	100%	3.57	4	112%	4	3.75	94%
問9	3.84	3.86	101%	3.91	3.92	100%	3.98	3.94	99%	4	3.96	99%	4	4	100%	3.98	3.97	100%	3.86	4	104%	4	3.75	94%
問10	3.87	3.89	101%	3.95	3.96	100%	3.96	3.94	99%	4	4	100%	4	4	100%	4	3.99	100%	4	4	100%	4	4	100%
問11	3.88	3.91	101%	3.91	3.79	97%	3.9	3.9	100%	4	3.93	98%	4	4	100%	3.9	3.89	100%	4	4	100%	4	3.88	97%
問12	3.86	3.9	101%	3.86	3.75	97%	3.96	3.96	100%	4	4	100%	4	4	100%	3.84	3.87	101%	4	4	100%	4	3.75	94%
平均値	3.63	3.72	102%	3.79	3.8	100%	3.9	3.87	99%	3.8	3.83	101%	3.79	3.75	99%	3.91	3.89	99%	3.56	3.78	106%	4	3.77	94%

【表2 ※前年比%】

	24年度	
	音楽学科	音マネジメント学科
問1	3.27	3.26
問2	3.27	3.21
問3	2.8	2.83
問4	3.41	3.21
問5	3.7	3.62
問6	3.51	3.26
問7	3.62	3.51
問8	3.44	3.44
問9	3.42	3.21
問10	3.4	3.17
問11	3.46	3.31
問12	3.36	3.19
問13	3.4	3.31
問14	3.38	3.28
平均値	3.39	3.27

【表3】

## 授業評価アンケート結果の分析（人文学部）

はじめに

人文学部は改編の最中にあり、平成 24 年度は日本文化、仏教文化、文化交流、人間心理、社会デザインの 5 学科が並存している。この複雑な状況においてサンプル数の少ない調査の分析に統計的有意性を求めることは困難であるので、焦点を日本文化、仏教文化、文化交流の 3 学科に当て分析を行うこととする。また各質問毎の分析はかえって全体像を見にくくすると思われるので、質問項目を、（１）問 1～4（学生の意識）、（２）問 5～8（学生から見た教員の意識）、（３）問 9～13（学生から見た授業構成）、（４）問 14（学生の満足度）と 4 項目にまとめ分析した。

### 1. 前年度との比較

日本文化学科

#### ■問 1～問 4 の学生の意識に関して

23 年度が 3.21～3.45 であったのに対して、24 年度は 3.18～3.45 と有意な変化は見られない。

#### ■問 5～問 8 の（学生から見た）教員の意識に関して

23 年度が 3.56～3.78 であったのに対して、24 年度は 3.56～3.75 と有意な変化は見られない。

#### ■問 9～問 13 の（学生から見た）授業構成に関して

23 年度が 3.52～3.58 であったのに対して、24 年度は 3.46～3.58 と、最低点がわずかに低下したが有意な変化とは言えない。

#### ■問 14 の学生の満足度に関して

23 年度が 3.61 であったのに対して、24 年度は 3.56 と、わずかに低下したが、有意な変化とは言えない。

仏教文化学科

#### ■問 1～問 4 の学生の意識に関して

23 年度が 3.00～3.56 であったのに対して、24 年度は 2.76～3.25 と、やや低下している。

#### ■問 5～問 8 の（学生から見た）教員の意識に関して

23 年度が 2.73～3.64 であったのに対して、24 年度は 3.07～3.45 で、平均としては変化していない。

#### ■問 9～問 13 の（学生から見た）授業構成に関して

23 年度が 3.00～3.44 であったのに対して、24 年度は 2.93～3.09 と、わずかに低下しているが、有意な変化とは言えない。

#### ■問 14 の学生の満足度に関して

23 年度が 3.24 であったのに対して、24 年度は 3.17 と、わずかに低下しているが、有意な変化とは言えない。

## 文化交流学科

### ■問1～問4の学生の意識に関して

23年度が3.13～3.69であったのに対して、24年度は3.12～3.42と、有意な変化は見られない。

### ■問5～問8の（学生から見た）教員の意識に関して

23年度が3.87～3.93であったのに対して、24年度は3.67～3.78で、わずかではあるが低下している。

### ■問9～問13の（学生から見た）授業構成に関して

23年度が3.73～3.93であったのに対して、24年度は3.58～3.65と、わずかに低下している。

### ■問14の学生の満足度に関して

23年度が3.94であったのに対して、24年度は3.59と、わずかに低下している。

## 2. 学科間、他学部との比較

### ■問1～問4の学生の意識に関して

日本文化は3.18～3.45、仏教文化は2.76～3.25、文化交流は3.12～3.42で、仏教文化が若干低い。基礎・共通2.75～3.24、音楽2.80～3.41、人間発達2.77～3.46と比較すると、日本文化と文化交流は比較的高い。

### ■問5～問8の（学生から見た）教員の意識に関して

日本文化は3.56～3.75、仏教文化は3.07～3.45、文化交流は3.67～3.78で、文化交流はやや高く、仏教文化はやや低い。基礎・共通3.33～3.63、音楽3.44～3.70、人間発達3.30～3.53との比較でも、文化交流はやや高く、仏教文化はやや低い。

### ■問9～問13の（学生から見た）授業構成に関して

日本文化は3.46～3.58、仏教文化は2.93～3.09、文化交流は3.58～3.65で、文化交流は若干高く、仏教文化が若干低い。基礎・共通3.23～3.38、音楽3.17～3.46、人間発達3.14～3.35との比較では、文化交流はやや高く、仏教文化はやや低い。

### ■問14の学生の満足度に関して

日本文化は3.56、仏教文化は3.17、文化交流は3.59で、仏教文化がやや低い。基礎・共通3.32、音楽3.28～3.38、人間発達3.20との比較では、日本文化と文化交流はやや高い。

（注：音楽学部のデータについては、音楽学科と音楽マネジメント学科の両データでの最低点と最高点を選び、人間発達学部のデータについては、学部全体のデータでの最低点と最高点を選んだ。）

## まとめ

全体として昨年と比べ大きな変化はなかった。学科間で若干の差が出ているが、サンプル数、サンプル抽出の方法、分析の方法等を考慮すれば、明らかな有意差と言えるかどうかは疑わしく、この結果を基に対策を講じるということではなく、あくまで参考データとすべきであろう。

（文責 橋元 淳一郎）